

子規のみちのくへの旅（二）

—『はてしらずの記』をめぐって—

黒澤 勉

目次

- 一、紀行文作家 子規
- 二、『はてしらずの記』の旅の目的
- 三、病いと旅
- 四、旅立ち

一、紀行文作家 子規

俳句・短歌・俳論・歌論・隨筆・書簡・小説：文芸の様々なジャンルに筆を染めた子規であるが、紀行文もものしていること、それがなかなか面白いことも忘れてはならない。子規は旅が好きだったが、それは紀行文を書くという営みと直結していた。紀行文を書くために、作品を創造するために、もっと強くいえば詩的な精神を求めて子規は旅をした。紀行文といってもその中に、漢詩や俳句、短歌などを含む紀行文であり、単なる散文的な記録といったものではなく、いずれも文学作品の創造をめざして書かれたものである。

その最初の作品が「遊岩谷行」であり、十四歳の時のものである。これは共に漢文を学ぶ「五友」（太田正躬・竹村鍛・三並良、森知之、それに子規を加えた五人。いずれも河東静溪から漢文を学んだ友人達で、子規はこれを「五友」と名づけ「五友詩文」を作ったりもしている）と共に久万山の岩谷寺（松山から四〇キロ程の所にある）に一泊旅行した時の漢詩文集である。母は体力のない子規が友人達について行けないだろうと案じたというが、はたして疲労重なって歩行不能となり、太田、三並が人力車を調達して子規を返した。これが子規の初旅で苦労の多いものだったが、以後の子規の旅にも病気が影を落としているものが多い。

十六歳で故郷松山を離れ、上京したことも、大きな旅といってよいだろう。学問に励み、立身出世を夢みた子規は、東京に憧れた。叔父、加藤拓川から東京に来たれ、という手紙を受け取ったことは天にも上るような大きな喜びであったとはいえ、はるか九〇〇キロ以上も離れた東京への、たった一人の旅は少年の心にとって不安なものであった。「出京の際、始めて三津を出帆する時にて、始めての旅といひつればなし実に心細く思ひたり」と後に『筆

まかせ』（書生時代の随筆）の中で書いている。

『はてしらずの記』は、子規が東北地方を一ヶ月にわたって旅した体験に基づく紀行文であり、これによって子規は東北人にも身近な存在となっている。分量からいって原稿用紙に直して六〇枚近く、その旅自体の長さも群を抜いて長い。そればかりでなく、その質においても最もすぐれているものであり、子規の紀行文を代表するものとして「名作」の名に恥じないと私は考える。ちなみに『はてしらずの記』以前に書かれた作品を挙げてみると『水戸紀行』『水戸紀行裏四日大尽』『しゃくられの記』『かくれみの』『かけはしの記』『旅の旅の旅』などといった作品がある。この他に『山路の秋』『大磯の月見』『大磯に引網を見る記』『第六回文科大学遠足会の記』『日光の紅葉』『高尾紀行』『鎌倉一見の記』などといった小品がある。

書生時代の子規の旅は、東京を拠点としてその近郊と、故郷の松山と東京間に集中しており、上京や帰省を利用するなど、本格的な旅とは言いがたく、遠足、ハイキング的なものも多い。それに比べて『はてしらずの記』は俳人として、文学者としての使命感をもったのぞんだ本格的な旅であり、紀行文であった。

二、『はてしらずの記』の旅の目的

『はてしらずの記』は、明治二十六年七月二十三日から九月十日まで、新聞「日本」に二十一回にわたって連載された俳諧紀行文である（後にこれに推敲を加えて『増補再版瀬祭書屋俳話』として明治二十八年九月五日に発行された）。実際に旅をしたのは同年、七月十九日から八月二十日までであり、旅をしながら並行的に旅先から記事を書き送ったが帰京後に書かれ、「日本」新聞に発表になったものもある。子規は「日本」新聞の記者であったか

ら、この紀行文は「日本」新聞社の社員の仕事として書かれたものである。その発表のスタイルからいうなら「新聞連載紀行文」とか「同時並行的紀行文」ということもできよう。

子規の文芸活動の拠点として「日本」新聞はきわめて重大な意義をもっているので、入社に至る経緯を簡単に紹介しておく。明治二十五年七月、子規は文科大学国文学科の学年試験に落第するや（「俳魔」にとりつかれて学校の勉強が手につかなかったという）、退学を決意、そのことを叔父、加藤拓川の親友である陸羯南に相談した。羯南は退学に反対したが、子規の意志は固かった。羯南は子規を「日本」新聞の社員として採用することを決めた。またその身が病弱であることを案じて、母と妹を招いて共に暮らすがよからう、と提案した。それを受けて十一月十三日、母の八重と妹の律が松山を出発する。以後、東京での三人の暮らしが始まる。また、明治二十五年十二月一日から神子田雉子町にあった「日本」新聞社に入社、通勤生活が始まる。以後、子規は明治三十五年、九月十九日、満三十四歳の若さで亡くなるまで「日本」新聞の社員としてその活動の場を提供され、その給与によって生活を支えた。明治二十九年以降、脊椎カリエスによる臥褥生活を余儀なくされた子規を羯南は見捨てず、最後まで社員として遇した。河東銓に宛てた手紙に同封した子規の自作の墓碑銘『日本』新聞社員タリ』の一句には千金の重みがある。子規は「日本」新聞によって支えられた文学者であり、子規の文学活動―俳句や短歌の革新運動、『墨汁一滴』『病床六尺』の連載随筆など、いずれも「日本」新聞を発表の拠点としたものである。

子規は「新聞」という近代のメディアによって育てられた文学者であり、新聞人として活動しつつ、文学者として偉業をなしたとげた最大の人といえる。文学者で新聞記者であった人は多いが、新聞人としてその生涯を通じた人、新聞人として文学活動を展開し、その影響力がこれほど大きかった人はおそらくいない。

子規の文芸活動は「日本」新聞の精神に叶うものだった。新聞「日本」は当時の軽薄な欧化主義の風潮に反対し、

伝統的な国民精神に立脚せよという主義主張をもつ新聞であった。羯南は単なるジャーナリストにとどまらない一個人の思想家でもあり、その鋭い政府批判ゆえに、新聞「日本」はしばしば発行停止の処分を受けてもいる。羯南が子規を採用したのは、単に親友の甥だからというのではなく、その人物を見込んだこと、国文学の素養豊かな子規が「日本」新聞社にとって貴重な存在だ、と考えたからでもある。

子規の文学活動も、新しい西洋の文芸―詩や小説が次々と翻訳され、その影響が表われ始める中であって、伝統的な俳句や短歌の、近代における再生をめざすものであった。(ちなみに『新体詩抄』の出版は明治十五年、シェークスピアの「ジュリアス・シーザー」の翻訳『自由太刀余波鋭鋒』なごりのきれあじが明治二十一年、アンデルセンの森鷗外訳『即興詩人』は明治二十五年である。)

子規の『はてしらずの記』の旅の目的も明治Ⅱ近代における俳諧紀行文としてこれを「日本」新聞に連載することによって、民族の文化の伝統、風雅の伝統を呼び起こし、日本文芸のもつ面白さ、魅力を伝えようとするところにあつたと思われる。

前述した通り子規は書生時代に多くの旅をし、紀行文も書いているが、それは学友、書生仲間の共同体による創作であつたり、そうでなくても仲間意識に裏づけられた戯作的な気分の強いものであつた。『はてしらずの記』にもそうした戯作的な気分は漂ってはいる。しかし、この紀行文は全国の「日本」新聞の読者に供するものであり、一ヶ月にもわたる長期の苦勞の多い旅であつた。風雅の旅、気楽な浮かれ旅のようにみえて、決して、それだけではない真剣な文芸意識、文学者としての使命感に裏づけられた旅であつた。

そもそも『はてしらずの記』はある日、突然思いついて出かけた旅といったものではない。この旅の前年、子規は『瀬祭書屋俳話』の連載(明治二十五年六月―十月「日本」新聞)によって華々しい俳句革新の烽火を上げてい

た。また明治二十二年以降、古典俳句を分類するという地道な仕事（「俳句分類」）に取り組んでおり、その仕事を通じて子規は古典俳句の世界に心開かれていった。こうした地道な研究、鋭い批評活動をさらに発展、深化させることが子規の課題となっていた。今や、俳諧の国民的な巨匠ともいふべき松尾芭蕉を読み、追体験する必要がある、と子規は考えたに違いない。『はてしらずの記』冒頭の「松島の風、象潟の雨いつしか」という言葉は、決して気まぐれな思いつきではなかったのである。

『はてしらずの記』を読むと、これが『奥の細道』を踏まえた作品であることがよくわかる。直接芭蕉の名を挙げ、『奥の細道』を引用していなくても明らかに、それを意識（時に『奥の細道』に対抗しているようにさえ感じられるところもある）して書かれたところもある。それについては後に詳しく説明することとして、芭蕉追慕の心が端的にうかがわれるところを一つだけ紹介しておこう。七月二十二日、子規は郡山から汽車に乗り、本宮に赴き、歩き続けた、その折の感慨である。

「とにかくに二百余年の昔芭蕉翁のさまよひしあと慕ひ行けば、いつこか名所故跡ならざらん。其の足は此の道を踏みけん。其目は此の景をもながめけんと思ふさへただ其の代の事のみ忍ばれて俤は眼の前に彷彿たり。

その人の足あとふめば風薫る」

子規の旅は一人旅だったが、実は芭蕉を心に描きながら、芭蕉と共に歩む二人旅だった。また一人、芭蕉に限らず、日本の古典詩人達と同行の旅であり、古典の世界との出会いの旅であったともいえる。『はてしらずの記』を読むと「古典との対話」という言葉も浮かんでくる。それは単に古典追慕ということだけでなく「近代」意識に裏づけられた「近代」という主体において、古典と対話していたこともわかる。『奥の細道』において芭蕉は西行や能因法師を慕い、古典への憧れにつき動かされて旅している。歌に知られた名所、旧跡を訪ねる歌枕の旅が芭蕉の旅だ

った。子規にもそうした思いはあるものの、それだけではない、時代意識がある。単に過去を美化し、過去に憧れるような思いはないのである。子規はめまぐるしく変化し、進歩する開化の明治人の意識に立って、古典と相対しているといってもいい。

この旅の目的は、河東碧梧桐に宛てた書簡の中で「小生此度の旅行は地方俳諧師の内を尋ねて旅路のうさをはらす覚悟にて」とあるように、地方俳諧師との交流を深めることにもあった。そのために子規は次のような書状を旧派の宗匠、三森幹雄（＝三木雄）に書いてもらって、その書状を持参して宗匠達に面会しようとした。

「添書 正岡常規 獺祭書屋主人 俳号子規 右友人正岡氏土用休暇中祖翁細道之跡を尋ね殊に地方視察之為游杖致候間、御逢之節ハ宜敷御風光被下成て特に文学上之事ニ付なるべく御問答之度ハ無遠慮御尋可被成候何事ニても本会へ之用事も御相談被下候て不苦候間念為添書仕候 勿々頓首 三森三木雄

磐城国 岩代国 陸前国 陸中国 陸奥国 羽前国 吟路大家御中（以下五句が並べられ「評点を乞う」としているが省略）」

子規は東北地方への旅の前に、旧派の俳人達との交流を深め運座形式の句会にあぶかったりしていた。しかし、リーダーの不在、年長者に対して率直に物言えぬことなど、不満をもっていた。にもかかわらず、旧派の俳人の書状を持参して旅をしようとしたのは、東北地方全体としてみれば、旧派の俳人の影響が圧倒的であったからである。書状をもつての旅ながら、子規としては自分の俳論を披瀝し「日本」派の俳人を増やすこと、自分の共感者を一人でも増やしたいという思いもあったものと想像される。『獺祭書屋俳話』を前年に連載していた子規は、その反応を期待する心もあったであろう。それに子規の性質として、リーダーにならねば気がすまないという面があった（そして、その資質をもっていた）から、三森幹雄の書状という「お墨付き」ありとはいえ、その権威に従おう

などという気はさらさらなかったし、信頼もなかったようだ。

旅の初め、二人の俳人と会った結果、「前途茫茫^{もはや}最早、宗匠訪問をやめんかと存候程に御座候」というような腹立たしい気持ちになっていった。その理由として、俳諧の話をしてもどうてい聞きわける耳をもっていなかったこと、第二に自分が若いを見て軽蔑し、幹雄門に入れ、などと言われたということを挙げている。

子規は地方の宗匠に会うため、旅路の姿である草履、脚絆でなく、裾を引く着物姿に下駄という書生の礼装をもつて、頭を下げ、礼を尽くして会い、熱い俳論、文学論をたたかわそうと考えた。しかし、結局のところ、話にもならなかった。旧派の俳人との交流はこれで打ち切られたものと思われる。以後の文学的交遊としては仙台において歌人の鮎貝槐園と語り合ったことが七月三十一日、八月一日の『はてしらずの記』に記されている。おそらく、地方俳諧師と有益な交遊があれば、紀行文の中に具体的な記述があつたはずである。それがみられないことは、この旅において地方俳諧師との交流が不毛であつたことを物語っている。

三、病いと旅

正岡常規は、明治二十二年、二十二歳の若さで喀血し、それにちなんで自らの号を「子規」(「子規」は訓で「ほととぎす」と読む。ほととぎすは、鳴く時に口が赤く見えることから血を吐く病い、即ち結核を意味する言葉として多くの人に知られていた)とした。興味深いことに、この喀血の原因(結核発病の原因といってよい)は同年四月、常盤会寄宿舎(松山藩藩士の子弟のための学生寮で、子規は明治二十一年九月に入寮し、二十四年十二月までこの寮で過ごした)の友人吉岡匡と水戸旅行したことにある、と述べている。即ち、「水戸紀行」の序の中で、な

せわざわざ「半年前」の旅の記録を書くかといえは（子規の紀行文の多くは旅をしている時、あるいは旅を終えて間もないころに書かれているが、「水戸紀行」は半年前に旅した時のことを思い出して書かれたものである。）一つには、書こうとは思っていたのだが、帰京後病氣のために書けないでいたこと、一つには友人竹村鍛錬卿の『常総漫遊日記』を読んで刺激を受けたことなどを挙げ、同時に、「此旅行は帰京後一ヶ月にして病氣を引き起し其病氣は余の一身に非常の変化を来し大切の関係を有する者なれば其原因となるべき此紀行を書かんと思ひつきしこと」という理由を挙げているのである。この旅は四月三日に本郷にあつた寄宿舎を發ち、霞ヶ浦、水戸などを経て、同七日に上野駅に着くという三泊四日の旅であつた。途中、疲労はなはだしかったため、人力車を雇つたり、左足裏に筋肉痙攣を起こして歩行困難となつたりした。また、寒さで全身が震えあがつたり、大雨に打たれてずぶ濡れになつたりするなど、大変な旅であつた。子規がいうように、この水戸旅行が、翌月の、一週間にもわたる咯血の直接のきっかけになつた、ということは確かに考えられることであろう。

実は子規は、前年（明治二十一年）八月一日頃、第一高等中学校の同級生、佐々田八次郎と鎌倉、江ノ島に小旅行をした時に最初の咯血を見ている。この時も、大雨に打たれ、冬のような寒さを感じると同時に、二度にわたる咯血があつた。この時のことについては、子規の書生時代の隨筆『筆まかせ』所収の「鎌倉行」と題する短文に記されている。それによると、佐々田は子規の突然の咯血に驚いて、どうしたのかと尋ねる。それに対し、子規は「如何にもあらず余は度々咽喉をいためて血を出すこと多ければ大方その類ならん」と答えたという。しかし「再び一塊の血を吐きたりしが、そのみにてなんのこともなし。果して咽喉なりしか何処なりしか保証の限りにあらず」（『筆まかせ』）とかすかな不安をもらしてもいる。子規がもし、この最初の咯血の後、無理をつつしみ、養生につとめたなら、後にあれほどの病苦を味わわなくて済んだかもしれない。

最初の咯血が鎌倉、江ノ島小旅行の時であったこと、そして二度目の本格的な咯血が水戸旅行の結果であったことを考えてみれば、子規の旅と病いが、いかに因縁深いものであったかわかる。

『はてしらずの記』—東北地方への旅においても、病いが重要な意味をもっていた。東北地方への長期の旅行をするくらいだから、少なくとも出発の頃には、健康で体力に自信もあったのだろう、と人は考えるかもしれない。しかし、そうではなかった。明治二十六年の年譜（旅に出たのはこの年の七月十九日である）をみると「この日より体調悪く臥床」（二月十二日）「血痰あり。夜、宮本仲来診」（二月十四日）などあり、二月は臥褥の状態で「日本」新聞社に出勤できない日が多かった。三月には、ほぼ毎日出勤しているが、四月になると再び「臥病」の日が多く「不眠」とも記されている。五月には出社したり、漱石を訪ねたり、俳人の伊藤松宇を訪ねたり、句会に出席したり、自宅で句会を催したりして、幾分健康を取り戻してはいる。「日本」新聞社勤務とはいえ、文芸欄担当であったためか、出勤しないで、私的な文学的交遊に時間を費やすなど自由であったらしい。

しかし、六月になるとあらたに「頭痛始まる」（六月七日）「夜、発熱劇しく九時頃臥床したが終夜頭痛に悩む」（六月八日）などという記述が続く。病気は「瘧（おこり）」であった。瘧は「わらわやみ」ともいい、間欠熱の一種で、隔日又は毎日、一定時間に発熱するマラリア性の熱病である。

「獺祭書屋日記」（「獺祭書」は「獺祭魚」—獺はとった魚をすぐ食わず、並べて置いて後で食う習性があるという—という言葉をもじって、子規が作った言葉で、本を集める人、読書家という意味である。「獺祭書屋主人」は子規の号の一つであり、読書家であったことを示す雅号でもあった。）から、六、七月頃の病状をうかがわせる記述を幾つか抜いてみる。「獺祭書屋日記」は漢文に俳句を添えた句日記で、明治二十五年九月二十四日から翌二十六年の九月二十三日までの日記となっている。この間、東北地方への旅をしているわけで、旅の間は「はてしらずの

「記」に専念、日記の記述はない)

「六月十日 熱発到夜間愈甚聘医就眠

夏水はかなく頼む命哉」

「六月十二日 午後三時寒氣襲肌戰栗後発熱蓋是瘧

寒し熱しわらはやみこそ新枕」

「六月二十六日 訪陸氏、出社、訪天外、瘧夕発

此夏を達磨と我の寒さ哉」

「六月三十日 瘧落

瘧落ちて足ふみのばす蚊帳哉」

子規が東北地方への旅を思いついたのは、この瘧が治まって間もなくであったらしく、七月五日の同日記に

「出社 訪幹雄氏

涼しさやはせをも神にまつられて」

とあり、初めて「芭蕉」(はせを)の名が見える。句は、芭蕉を神のように祀ってみちのくへの旅に出ようとする
と、おのずから、その涼しさがしのばれることだ、というような意味であろう。

その前の六月二十八日、臥褥状態の中で林江左からの便りを受け取っており、その内容は、東北地方を旅するにあたって、旧派の宗匠、春秋庵幹雄(三森幹雄)と打ち合わせをする、ということだった。子規は旧派の宗匠の紹介状を持参して、東北地方の俳人達との交遊を深めようと考えていたのである。七月一日、藤野古白や漱石が子規を訪れているが、再び林からの手紙があり、幹雄への紹介日を七月三日にする、ということだった。七月三日、林

江左の紹介により、子規は日本橋檜物町料理店倉田屋で三森幹雄、島本青宜に会った。子規は古典俳句や『奥の細道』について語り、芭蕉にならって東北地方への旅をしたいという夢を語ったことであろう。明治における俳句とということについても語りあったに違いない。七月五日、三森幹雄を、翌六日には島本青宜を訪問し、東北地方への旅立ちの挨拶をした。しかし、その後、主治医であった宮本仲から、旅を思いとどまるように注意を受けて出発が遅れた。

旅に出る前日の七月十八日、伊藤松宇に宛てて次のような手紙を出している。

「拝啓 先日は失敬仕候。扱小生出発いよいよ明日と相さまり候故貴宅雅会には相負き候次第不悪御諒察被下度候。松島の風に吹かれむ単衣^{ひとえもの}」

明日から東北地方への旅に出かけるので、残念ながら伊藤宅での俳句会に出られないという断り書きである。「松島の」の句は、単（ひとえ）の着物を着ると、松島の涼しい風に吹かれないという思いが一層つのることだ、と松島への憧れを語っている。

この句は旅立ちに際して送られた饞別の句の後に、自らの心境を語るものとして『はてしらずの記』にも収められている。しかし、誰に宛てて、どのような状況のもとに作られたかは記されていない。また、七月十九日の「瀬祭書屋日記」にも「汽車発上野、宿宇都宮、佃氏宅」とあり、その後にこの句が記されている。宇都宮の佃田一子宅に泊まり、おそらくこの句を揮毫したのであろう。「松島の風に吹かれむ単衣」の句は三度にわたって、東北地方への旅立ちの心を語るものとして記されたということになる。

この句を得るまで、つまり、いよいよ東北地方に向けて旅に出るまで、子規は「結核」と（六月になってからの）「瘡」の二つの病いに苦しめられて、出発が遅れてしまったのである。

『はてしらずの記』の記述においても、こうした病いのことが書かれている。それを具体的にみてみよう。

「松島の風象瀉の雨いつしかとは思ひながら病める身の行脚道中覚束なくうたた寝の夢はあらぬ山河の面影うつつにのみ現はれて今としも思ひ立つ日のなくて過ぎにしを今年明治二十六年夏のはじめ何の心にかありけん 松島の心に近き裕かな」と自ら口すさみたるこそ我ながらあやしうも思ひしがつひにこの遊歴とはなりけらし」

冒頭の一節である。

——芭蕉にならって松島の風に吹かれてみたい、象瀉の雨を眺めてみたいとは思いながら、病いの身体で旅することも不安である。にもかかわらず、うたた寝の夢にみちのくの山河が幻となって浮かぶ。さあ、今だと出発の決意もつかぬまま過ぎてきたが、ふと口をついて出てきた一句がある。松島の心に近き裕かな——裕を着るとその涼しい感触は忽ち松島へと我が思いを駆り立て、みちのくへの憧れは我ながら不思議なほど強まるばかりだ、そんな思いで過ごしてきたが、やっとこの旅立ちとはなった……こんな内容である。

子規として自分が結核の身であり、旅に出ることに対する不安もあったであろう。しかし、その不安以上に強かったのは『奥の細道』に触発され、刺激を受けて夢見た松島・象瀉の山河に対する憧れであった。そこには、「明治」という新しい時代を生きる俳人としての使命感もあった。それは「日本」新聞を拠点として明治の俳諧運動を展開しているこうとする「野心」から生まれたものでもあった。

芭蕉の場合「古人も多く死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と『奥の細道』に記すように、深い内的な衝動として、旅に駆られていたようである。それは俳諧の真実を求める真摯な気持ちと一体のものであった。そのために芭蕉の旅は「旅にやんで夢は枯野をかけ廻る」「野ざらしを心に風のしむ身かな」の句にも見られるように、病いや死のイメージを帯び、悲愴感すら漂っている。『奥の細道』にも「持

病さへおこりて消え入るばかりになむ」とか「遙かなる行末をかかへて、かかる病おぼつかなしといへど、羈旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路に死なんこれ天の命なりと気力いささかとり直し道縦横に踏んで」などという一節も見える。芭蕉の持病は胆石症で、冷えると激痛の発作に襲われたという。また、弟子の如行に宛てた手紙の中に「持病下血などたびたび、秋旅四国西国もけしからずとまづおもひとどめ候」（奥の細道の旅の翌年、元禄三年四月十日）とあるように、持病の痔が悪く、四国や西国への旅を断念したこともあった。

にもかかわらず、芭蕉はある程度、健康への自信もあり、少なくとも健脚の持主であったのではなからうか。でなければ、遙かみちのくへの、徒歩の旅というのは考えにくい。それに比して、子規は二十六歳の青年とはいえ（芭蕉の東北への旅は四十六歳の時だった）、結核を患う病身であり、「わらはやみ」も治ったばかり、日頃の脚力も、体力も乏しかった。子規が旅に出ることができたのは人力車や汽車という文明の利器を恃みにできたからであり、何よりその楽天的な性格のゆえでもある。

それを端的に示すのが、冒頭に続く次の一節である。

「先づ松島とは志しながら、行くては何処にか向はん。ままよ、浮世のうき旅に行く手の定まりたるもの幾人かある。山あれば足あり、金あれば車あり。脚力尽くる時山更に好し財布軽き時却て羽が生えて仙人になるまじきものにもあらず。自ら知らぬ行末を楽みにはて知らずの日記をつくる気軽さを誰に語らんとつぶやけば罔両傍に在りてうなづく。乃ち以つて序と為す。あなかしこ」

——まず松島へと志しながら、行く手はどこに向かおう。ええ、どこに向かおうと足の向くままよ。この浮世に行く先の定まっている人がどれほどあるというのか。山があつたらこの足で登ればよい、金があつたら人力車を雇えばよい、歩けなくなつたら（そこで山を眺めたり、野宿したりするわけで）山もなおさらけっこう。もし、金がな

くなったら、懐も軽くなって、仙人のように軽々と空を飛べるだろう。どちらに転んでも、面白おかしい浮かれ旅、自らも行く先定めぬ、あてどない旅路を楽しみに、その名の通り『はて知らずの記』を書く気楽さよ、と一人ほほえみながら呟くと傍らの魑魅罔両まで、その通り、その通り、とうなずいてくれる…

この楽天的、享樂的な姿勢があればこそ、子規は旅に出かけることができた。

いま紹介した文の最後に「乃ち以つて序と為す、あなかしこ」とある。「あなかしこ」は、いうまでもなく、「恐れ多い」との意、手紙の文末に用いる挨拶言葉で「恐惶謹言」というような漢語に相当する。こうした文体は、子規がこの紀行文を一種の書簡として「日本」新聞の読者を意識して書いたことを物語っている。この文章が新聞に発表されたのは、明治二十六年七月二十三日のことで、旅立ちが七月十九日だから、その四日後の発表である。「この遊歴とはなりけらし」という言葉にも、すでに旅に出た者の実感がこもっている。

しかし、「あなかしこ」とは、書きながら当日の新聞発表の記事はさらに続いている。これは、本来なら「あなかしこ」までを一回分としたかったのに紙面の編集のため、次の記述とあわせただけではないかと推測される。続く記述をみると、「この遊歴」以前のことと呼吸をあらたにして書かれているのである。

まとめてみると、ここまでの一節は全体の「総序」にあたる部分で、旅の目的が『奥の細道』を追体験することにある、ということ、書名を『はて知らずの記』と題したゆえんが記されている、ということになる。

四、旅立ち

「総序」に続いて、具体的に旅に出る前の状況が記されている。これを「旅立ち」としてもよい。しかし、ここ

でもさらにまた子規を襲った別な病いのことが記されている。それを子規は次のように書く。

「三春病ひに鎖して筆硯やうやうにうとみ勝なるに六月のはじめつかたより又わらはやみに罹りて人情の冷熱一生の盛衰は独り心に入みながら時鳥の黒焼も其効果あらず野道の女郎花われ落ちにきと人に語ふ間も無く木末の朽葉ふるひかへしふるひ落して兎角とかくする程に一月も過ぎぬ」

——孟・仲・李の春三ヶ月の間、病いのため部屋に閉じこもって外に出ることもできず、筆・硯にさえ次第に遠ざかり、詩文をもものすこともなく過ごしてきたわが身であった。しかるに六月の初めころより、これまでの肺病ではなく「わらわ病み」まで患ってしまった。そのため体温が急に高くなったかと思えば、今度は冷えるといった具合で、熱の上昇、下降に悩まされ、おかげ様で、人情の冷たさ、また温かさをたつぷりと味わうことになってしまった。わらわ病みの特効薬といわれる時鳥の黒焼を食ってみたが、何の利き目もない。この一月は、まるで一年も経ったような感じがする。僧正遍昭は「名に愛でて折れるばかりぞ女郎花我墮おちおにきと人に語るな」と詠み、女郎花という名にひかれてつい手折ったばかりで、墮落などしていない、と詠んでいるが、自分も女色に耽って、そのために詩文をもものすことができなかつたのでなく、ひとえに、わらわ病みのせいだ、と人に弁解する暇もなく、また秋になって木末の朽葉が、ひらひらと、はかなく散っていくようなわびしさ、寂しさを味わっているうちに、はや一月も経った。

今、文言をかなり補いながら、仮に以上のように解釈してみたのだが「時鳥の黒焼も」以下の文意がとりにくい。一般に、子規の文章は表面的には難しい漢語や古語が豊富に使われてはいるものの、きわめて明快で、ユーモア溢れるものが多い。しかるに、この箇所だけはどうもわかりづらい。(読者の御教示を待ちたい)

いずれにせよ、ここで子規はわらわ病みのため一月の間、苦しんだということを戯作口調のユーモラスな筆緻で

書いたのであろう。すでに記したように、子規は明治二十六年六月、一ヶ月にわたって寒氣と発熱を繰り返すわらわ病み（瘡^{おこり}）に苦しんでいた。

わらわ病みに苦しんでいる時、鉄眼禪師が見舞いに訪れた。子規はその折のことを次のように記している。

「ある日鉄眼禪師のわが病床をおとづれて今より北海行脚に志すなりと語らるるに、羨ましさは限りなければも羽抜鳥の雲井を慕ふ心地して

涼しさやわれは禪師を夢に見ん

と餞別の一句をまゐらす」

——ある日鉄眼禪師が自分の病床を訪れた。聞けば、これから北海道への行脚に出かけるのだ、という。みちのくへの旅に出たいと思っていた自分は、旅に出ることのできる禪師が羨ましくてならないが、羽抜鳥が自由に空を飛びたいと思うようなもので、どうにもならない。そこで

涼しさやわれは禪師を夢にみん（北海道への旅に出かけて、涼しく行脚を続けていくであろう禪師よ。自分はせめてあなたのその涼しい旅姿を病床にあつて夢みることにしましょう。）と、はなむけの一句をしたためた。

（講談社版の詳細をきわめた「子規全集」の年譜によれば、七月八日、子規が鉄眼を訪問しており、鉄眼が子規を見舞ったということは記されていない。子規は、文脈にあわせて鉄眼が自分を訪れたという形にしたのであろうか。）

補足しておく、鉄眼禪師は「天田愚庵」の名で知られる歌人でもある。鉄眼は安政五年（一八五四年）磐城国平で生まれたが、明治元年、十五歳の時、板垣退助を参謀とする西軍に、平城が攻撃を受け、その時以来、父母・妹が行方不明となり、これを必死に探し求めていたということもよく知られていた。

また、二十三歳のころから短歌を作っていたが、それは万葉集に学んだものだった。

子規は明治二十五年十一月二十五日、虚子と共に京都の清水にいた鉄眼を訪れている。おそらく鉄眼の人柄（気骨あふれる、同時に純情な人情に厚い人として知られていた）と、その短歌に魅かれていたのであろう。

『松蘿玉液』には、「愚庵」の見出しのもとに、虚子と共に訪れた時のことが印象深く記されている。それによれば、主客三人、茶を喫し、発句を詠み、これを書としてしたためたという。

子規のみちのくの旅へのあこがれは、この鉄眼の訪問によってなお一層、強まったに違いない。「涼しさや」の句には、旅に出ようにも出かけられない、病身の身をくやくしく思う気持ちが伺われる。子規は「羽抜鳥」のように自由を奪われ、病床に身を横たえるしかない身であった。医師の宮本仲も、やせた子規の身体を心配したのであろう。「夏やせを藪医者殿に見られけり」（『獺祭書屋日記』七月八日）と詠んでいる。「藪医者」とはひどいが、旅に出たい思いがそういわせたのであろう。同じく「夏やせは涼しきものと知り給へ」とも詠んでいる。（同、七月十三日）これは、悔しまぎれの一句でもある。

脱線であるが、この年（二十六年）、七月十日は文科大学の卒業式で漱石や菊池寿人、菊池謙二郎、米山保三郎ら子規の友人達は、無事卒業している。前年「俳魔にとりつかれ」句作に熱中のあまり、勉学を怠り、落第した子規は、もはや押し寄せの勉強から解放され、「日本」新聞社員として、俳句革新の意欲に燃えていた。みちのくへの旅は、その意欲の現われでもあり、卒業した同級生達を尻目に見る気持ちも（幾分の劣等感とともに）働いていたかもしれない。

このころ子規は宮本仲医師をしばしば訪ね、病気を見てもらっているが、それは旅の許可を得るための診察であった。しかし、容易に医師は許可をしなかった。旅立ちの直前のころの様子を子規は次のように記している。

「やがて病の大方おこたりしかば枕上の蓑笠を睨みて空しく心を苦しめんよりは奥山羽水を踏み越えて胸中の鬱気を散ぜんには如かじと我も思ひ人も勸むるままに旅衣の破れをつくろひ蕉翁の奥の細道を写しなどあらましとのへて今日やたたん明日や行かんと思ふものからゆくり無く医師にいさめられて七月もはや十九日といふにやうやう東都の仮住居を立ち出でぬ」

——やがて瘡も「大方」おさまった。全快したとは、さすがに書けなかった。その自信はなかったのである。それより肝心の、命とりになるかもしれないぬ結核の身であること、不安はないわけではなかったらう。これまでの経験から旅に出て病いに苦しむことは予想されたはずである。しかし病状がはつきり現れなければ、安心して、無茶な行動になりがちなのが人の常である。結核という病気は一直線に病状が悪化して死ぬという病気ではなく、「くすぶる病気」だということを医師に聞いた。表立った症状が現われていなくても、病いはぶすぶすとくすぶり、悪い条件が重なれば、たちまち炎となって燃え上がり命を奪うのである。若い子規は、そのことに気づかなかった。

閉ざされた病室で過ごす時間がなければ長いほど旅への、自由への憧れはつのるのだらう。一人空しく枕上に吊された蓑笠を眺めて心を苦しめているよりは、奥羽みちのくの山河の自然の中に我が身を置いて、ふさぐ思いを解放する方がましだ、と子規は思う。「人も勸むる」というが、俳人達は芭蕉のように旅をして発句を作ることのすばらしさには同感しても、病弱な子規が旅に出ることを勧めたかどうかあやしい。せっかちな子規は『奥の細道』を書き写し、さあ支度も整ったと出発しようとした。そこに「ゆくりもなく」——思いがけなくも医師の忠告があった。思いがけなくも、というのは子規の勝手であって、冷静に考えれば誰が考えても無理な身体だったのである。おそらく旅に出ようとする子規と、それを止めようとする医師の間に、幾度も押し問答に似たやり取りがあったのではなからうか。やっと、そう、やっと「七月も、十九日」になって上根岸の借家を旅立つことになる。

「かねて旅立のよし知りたる誰彼よりよりに贈られたる餞別の句」が次に紹介される。二十六歳の子規は、もはや、いっばしの俳句の宗匠である、といつては失礼にならうか。しかし「日本」新聞の読者にはそう見えたであらう。丁度、芭蕉が「前途三千里のおもひ胸にふさがりて」「離別の泪」を流し、人々も「途中に立ならびて後かげのみゆる迄はと見送」ってくれたように。

しかし、この旅立ち―別れには悲しさが無い。餞別の句も、呑気な、あるいは勇ましいものである。旅立ちの抱負を語る子規の言葉を聞いて、人々もその思いに感化された結果であらう。

二宮素香（伊予宇和島の人で、弟の孤松と共に明治二十六年頃の俳句会にしばしば参加した）は「松島の紙帳につるせ松の月」「白河の関で着かへよひとへ物」と詠んだ。いずれもみちのく白河・松島へ向けて旅立つ子規へのエールである。

二宮孤松は「松島へ昼寝しに行く行脚かな」と詠んだ。句は七月十一日付の、子規宛書簡に見えるものである。書簡の全文は次の通り。

「一昨日ハ遠路之処御来駕被下難有奉存候 昨日ハ又高吟色々御寄贈を辱かたじけなふうし感謝不斜なめならず存候 御約束之句何敷か一首と存じ候得共一向にまとまり不申 左に記載之数章より御意に叶ひ候ものを御選択被下度候

松嶋へ昼寝しに行く行脚かな

夏籠りや松嶋ハ実によき処

松嶋の見て来て話せなつの月

白川の関の青葉や檜笠

石川鶯洲（三森幹雄門で東京の人）は「涼しさの君まつしまぞ目に見ゆる」と詠んだ。林江左（幕臣で江戸の人）

子規に宗匠を紹介する労をとってくれた）は硯を餞はなむけとして送り、「旅硯清水にぬらせ柳陰」の句を贈った。

「日本」新聞社の同僚、五百木飄亭（松山に生まれ、子規と同じ常盤会寄宿舎に入り、新海非風と三人で文学的交遊を深めたこともある）は「松島で日本一の涼みせよ」と気宇壮大な一句を認めてくれた。「其外にも数へ盡すことができないほど、多くの餞別が寄せられたという。子規もこれに応えて「松島の風に吹かれんひとへ物」と詠んだ。夏になってひとえの着物を着ると、松島の涼しい風に吹かれないという思いが一層つのる、というのである。

みちのくへの旅は、東京の暑さを忘れ、松島の涼しい風に心身を浸したいという、東京脱出・病床脱出の思いでもあった。